

オーストラリアのトーテミズム

堀 喜 望

オーストラリアのトーテミズムは、その構造と機能が複雑であるのみならず、原住民の生活が原始的で文化の發達が極めて低級であることと關聯して、人類學的關心の對象であつた。元來この海洋大陸がヨーロッパ人に知られたのは大陸發見の時代まで廻ることができ^るが、その状態は久しく知られず、十八世紀後半のクックによつて東海岸が探險されるまでは殆んど想像の島として放置せられた。従つてこの地の原住民の間にトーテミズムの風習が見出されることが報告されたのも、漸く一八四一年グレイの探險をもつて最初とするといはれる^が。然るにその内陸の開發が進むに従つて、それが孤立大陸であり、動物植物の自然的分布に關して舊大陸とはその趣を異にし、後者にあつては最早や見られぬ殘存種が棲息することが明かとなると共に、その住民の文化的生活が殆んど原始的な野蠻状態を示し、人類文化に關してその進化の原始的遺制を殘存するものと考へられ、人類文化の研究者たちにより異常な注目を惹くに到つた。そこに見出されるトーテミズムもかかる原始文化に關聯する制度として理解されたのである。

トーテミズムをかかる人類文化の原始的形態として普遍的に解釋し、これを動植物崇拜の一種として理論的に統一する課題を最初に提出したものがマクレナンであることは周知のところである^が。マクレナンの理論はアメリカのモーガンによつて批判され、兩者の論争は人類史の領域に大きな問題を提出し、その發達に貢獻するところがあつたが、それに關聯してトーテミズムについてホウヴィトとファイザンによるオーストラリアの新しい事實を明かならしめた。モーガンはアメリカ・インディア人の事實に基いてトーテミズムを社會的集團の區別とその婚姻組織とに關係せしめ

て解釋したが、モーガンの懇請によりボウワイトはかかる方向に従つてオーストラリアの南東のデイエリ、カミラロイなどの實地調査を試み、その社會組織、婚姻制度、トーテミズムの關聯について自らも理論的見解を發表した。

このやうなボウワイト、ファイゾンの研究と並んで、オーストラリア原住民の實地調査は各部族の中に進められた。例へばヴィクトリア州におけるブラフ・スマイスの報告、ウツドの南オーストラリア、ロスのクキンズランドの調査があり、また概觀的研究としてはカーの古典的な大著、バセドウ、トマスなどの報告が知られ、クラッチはその神話傳承の蒐集を試みてゐる。かくの如くにしてオーストラリアの原住民の實態は次第に明かにされ、人類學の研究に確實な資料を提供するに到つたが、その實態調査によつてトーテミズムの問題に決定的な影響を及ぼしたものは、有名なボールドウイン・スペンサーとギレンによる中央オーストラリアの調査研究である。それは、中央オーストラリアのアランタ、ルリチャ、ウラブンナの諸族、及び北部地方のウンマツエラ、カイテシニなどの部族から北方カリペンタリア灣に臨むマラ、アスラの諸族に及ぶ廣大な地域と多數の部族を含む詳細な調査であり、その社會形態から婚姻制度、各種の儀禮、呪術、神話の信仰、藝術、生活風習の諸相に互る綜合的な研究である。トーテミズムの理論的研究は何れもこれを重要な權威として引證すると共に、これを新たな刺激として多彩な發展を示したことは周知のところである。

このスペンサーの業績に最初に注目し、これを基礎としてトーテミズムの理論的解釋を試みたものは、フレイザーである。フレイザーはその食用呪術の理論、懷妊理論の發展の過程を通じてスペンサーの報告に基いてゐると共に、スペンサー自身の研究を評價し、その調査の發展に助力と示唆を興へてゐる。ラングやファン・ゲネップなどフレイザーの理論的見解に對立する學者にあつても、スペンサーの事實は尊重され、これに對して自己の立場からの説明を興へてをり、デュルケームの獨創的な研究は、専らこの事實を基礎とし、これにシュトレロの調査を比較批判的に依據しつつ組織された理論であつた。シュトレロは中央オーストラリアの西マグドネル山脈のハーマンスバーグのドイ

ツ宣教師として、この地方の滞在旅行の期間を通じて得たところの主として神話、信仰に關する原住民の資料を蒐集してをり、その調査の領域と内容に關してスペンサーのそれと略、同一の對象を取扱つてゐる。しかし兩者の間には報告の相違があるが、シュトレロの調査がスペンサーの最初の調査よりも一層キリスト教化された土人の報告に基いてゐることをスペンサー自身が更に後の調査によつて確かめたと云つてゐる。⁵⁾その點に關しては兎も角、スペンサーの研究が數度の調査によつてその權威を高めたのみならず、この地方の研究を刺戟したことは、パーカー、マッシューなどのその後の調査も、スペンサーの影響の下にあることによつても否定できぬところである。

スペンサーの調査がデュルケームの原始社會に關する機能的研究を刺戟したことは上述したが、この理論が實地調査の機能主義的方法として自覺され、オーストラリアの實證的研究に新たな發展をもたらしたものは、ラドクリフ・ブラウンのオーストラリアの社會組織の研究であり、彼を指導者とする研究雜誌「オセアニア」の學者たちの研究である。かくの如く機能主義の立場は古くデュルケームの研究を通してオーストラリアと深い縁故をもつと共に、またこの立場を代表するマリノウスキーが同じく文獻資料を主として、この地方の家族關係について集中的・綜合的研究を試み、その機能主義的研究への豫備的萌芽を示してゐることが注目されてよいであらう。¹⁰⁾かかる研究の發展にオーストラリアが重要な役割を擔つたことは、それが他の地方から孤立し、その比較的等質的な文化と單純な生活様式とによつて、その關係の全體を純粹に實驗的に理解することが可能であつたのによるものであり、單なる偶然ではないであらう。

このやうに未開文化をその社會的文化的關聯の全體の中で相互に關係する相に従つて理解し、新しい實地調査の事實を基礎としてオーストラリア原住民の生活を全體的に研究したものにエルキンの著書があり、またアルネムランドの特定地域を限定してその綜合的調査がウォーナーによつて纏められてゐる。¹³⁾これらの比較的最近の研究によつて、トードミズムの構造も明かにされ、スペンサーなどにおいて尙ほ不十分な諸點が訂正されると共に、その文化的機能

について新しい理解が導かれてゐる。

われわれはこれらの研究に基づいて、オーストラリアのトーテミスムについて、その親族的生活における役割、並びにかかる生活を基礎としてその文化的諸制度と結合してこれを統一形成してゐる特殊の様態を考察するであらう。

註1 オーストラリアの最初の発見は一五〇三年フランス人 Binot Paulmyer によつてであると云はれるが、實はそれは現在のマダガスカル島であるとも考へられてゐる。一五三一年に Guillaume le Testu がこの大陸を望見発見したとも主張されるが、何れも明確な證據を缺いてゐる。オランダの歴史家 Wyfflic は一五九七年、Tara Australis について報告し、マヘー・グイネアとの關係を述べて最も南方の大陸であることを書いてゐる。尤も支那人にとつては古く十三世紀頃から知られてゐたらしく、Marco Polo も南方大陸についての評判を傳へてゐる。しかし十五・六世紀の大陸発見の目醒しい時代からは殆んど取り残されたままであり、十七世紀に入つて僅かに De Torres, De Quirós によるトーレス海峡の通航(一六〇五年)、Abel Janszoon Tasman のタスマニア発見(一六四二年)があつたに過ぎず、その實態は殆んど知られてゐなかつた。オーストラリア東海岸の各地が探險され、その植民及び内陸調査への最初の道を開いたのは James Cook の第一回學術調査探險の周航の途上であつた(1769-70)。續いて一七八八年ボタニー灣に英國植民地が設置されたが、その開發は僅かに海岸地帯を出でず、從つて學問的實地調査は十九世紀に入つてからである。(Cf. H. Darnley Naylor: Australia, in *Encyclopaedia Britannica*, 14. ed. Vol. 2, p. 713 sqq.)

2 G. Grey: *Journal of Two Expeditions of Discovery in North-Western Australia*, 2 Vols., 1841.

3 J. F. McLennan: "The Worship of Animals and Plants", in the *Fortnightly Review*, 1869, 70.

4 L. Fison & A. W. Howitt: *Kamihoi and Kurnai*, 1880, A. W. Howitt: *The Native Tribes of South East Australia*, 1904.

5 Brough-Smith: *The Aborigines of Victoria*, 2 Vols., 1878, J. D. Wood: *The Native Tribes of South Australia*, 1879, W. E. Roth: *Ethnological Studies among the North-West-Central Queensland Aborigines*, 1897, E. M.

- Curr: *The Australian Race*, 4 Vols., 1886-87. H. Basedow: *The Australian Aboriginal*. N. W. Thomas: *The Aborigines of Australia*, ditto: *Kinship Organisations and Group Marriage in Australia*, 1906.
- 9 B. Spencer & F. J. Gillen: *The Native Tribes of Central Australia*, 1899. *The Northern Tribes of Central Australia*, 1904. *The Native Tribes of the Northern Territory*, 1914. *The Arunta, A Study of a Stone Age People*, 1927.
- 7 C. Strehlow: *Die Aranda- und Loritja-Stämme in Zentral-Australien*, bearbeitet von M. F. v. Leonhardt, 1907-1915.
- 8 B. Spencer & F. J. Gillen: *The Arunta*, Preface, p. ix.
- 9 K. L. Parker: *The Euthayi Tribe*, 1905. J. Mathew: *Two Representative Tribes of Queensland*, 1910.
- 10 A. R. Radcliffe-Brown: *The Social Organization of Australian Tribes*, (The "Oceania" Monographs. No. 1, 1931). *Former Numbers and Distribution of the Australian Aborigines*, in *Official Year Book of the Commonwealth of Australia*, No. 23, 1930.
- 11 B. Malinowski: *The Family among the Australian Aborigines*, *A Sociological Study*, 1913.
- 12 A. P. Elkin: *The Australian Aborigines, How to Understand them*, 1928.
- 13 W. Lloyd Warner: *A Black Civilization, A Social Study of an Australian Tribe*, 1927.

—

オーストラリアにおけるトーテミズムの特色は、人間的生活と自然との生命的な連環一體性の感情を基礎とし、それが社会的日常性の生活と祭儀的神聖性の生活とを貫いて、社会的活動を自然の活動と結合してその中に安定せしめると共に、自然を人間の社会的關聯の下で組織統一するはたらしきをしてゐることにある。それは公認された制度とし

て、部族の神話的體系において保證され、部族生活の全體に滲潤する色調を與へ、その社會的構造を相互に結合する龍骨的な支柱を形成する。従つてそれは單にそれを擔つてゐる社會組織や宗教集團の特定な偶然的な現象にとどまらず、このやうな背景においてその個別的な組織を成立させてゐるといふことができる。かかる意味において、それはトーテムイズムの典型的な形態を示し、従つてその社會的・儀禮的生活における全體的な機能的關聯の理解は、かかるトーテム的形態の根源的な様相の一つをあらはにするものであらう。

オーストラリア原住民の生活が、その自然的環境に依存し、専ら放浪的な狩獵蒐集の單純生活を營むことは周知のところである。彼等は植物の育成が種子の發芽によるといふ事實を知らず、その生産生活において農耕或ひは家畜飼養の方法と組織をもたない。その日常生活にあつては、子供を含む數人の家族が近隣の二三の家族と協同して、男たちは部族の狩獵地を放浪し、女たちはその附近の植物や昆蟲などの小動物を蒐集する。従つてその居住する小舎は極めて簡單粗雑であり、ただ蚊の襲來を防ぐに用ゐられる程度で、夜も戶外で焚火の周圍で眠り、殆んど戶外で生活してゐる。

このやうな生活において、彼等は狩獵地として一定の限られた共同の領域を所有して、「部族」の集團的統一を形成してゐる。部族はこのやうな特定の地域を領有居住し、一定の血縁的な近親性が信ぜられ、特定の言語、方言を共通にしてゐるのみならず、多くは他の部族から區別される自己の部族名を有し、獨自の儀禮信仰、及び法習慣に従つて集團としての共同を自覺してをり、原住民の生活における基本的な社會的單位である。彼等はそれを自己の「故郷」の地と考へ、神話的祖先の活動の記憶に充され、その土地への精靈的紐帶の感情をもつてゐるのみならず、かかる部族の領有地の景觀は到る所に彼等の神話的祖先の行動の跡を残し、その記念の名前をとどめ、或ひは禮拜の聖所として聖別されてをり、かかる神話に關聯してトーテム的な意味をもつた特殊な岩や洞穴、樹や鼠によつて取り圍まれて

る。彼等の放浪的な日常生活はこのやうな部族的領域の中で営まれるのである。

しかしながらかかる部族的集團は、全體としての政治的・經濟的な組織として統一されてはをらず、その成員は部族領域の各地方に分散し、地方的集團或ひは父系的な「氏族」集團に組織され、これの獨自の活動によつて統制されてゐる。即ち部族は上述の如き部族感情によつてその親近性が自覺されてはゐるが、それが一體となつて政治的活動を行ひ、或ひは戦争に共同するといふことはなく、また共同の蒐集活動をすることもない。これらの事柄は凡て地方的氏族集團が關はり、後者は長老の統制の下に、單獨で或ひは數集團の協力によつて活動する。従つて部族集團としてはこれらの地方的氏族集團を基礎とし、婚姻その他の社會的交渉によつて相互に關係するところの結合の疎なる集團である。

このやうにして地方的氏族集團は部族生活における基礎的な社會組織を形成してゐる。それは、上述の部族的神話における精靈の宿る棲家とされた部族領域に散在する一定の場所を中心として集合する多數の家族の集團である。それは自己の集團名をその土地の自然的形狀、或ひはその歴史的な連想により、またトータム種に従つて名づけてをり、集團の長老によつて統制され、まゝ集團相互の關係が協議される。かくしてそれはかかる神話的精靈的紐帶によつて特定の地方に結合された地域的集團である。しかしそれと同時にかかる土地との精靈的紐帶によつてそこに生れる成員は、神話的祖先に對する一種の血縁的な親縁關係に結合され、「一個の擴大された家族」といふ系譜的・血縁的な觀念を共有してゐる。それと共に部族の婚姻風習として外婚姻、招婦婚、及び夫婦の子女は父の部落に屬するといふ父方居住制が行はれるために、この集團はまた父系的氏族組織の樣態を示し、これらの成員と他の集團に屬する彼等の妻たちによつて構成されてゐる。このやうな集團が部族の各地に多數散在してゐるのであるが、廣大な土地に稀薄な人々が分布してゐるため、その集團の規模は概して小さく貧弱である。例へばアラント族に關するスペンサーの報告によれば、この部族の中の最大の地方集團もその成員は四十人を超えず、それが百平方哩程の土地を占有して相互に

孤立してゐる。⁽⁴⁾

かくの如くこの地方的集團は、父系的な氏族成員と、その謂はば外來者たる家族たちによつて構成されるが、この父子の「血縁的」關係はその生理的肉體的な紐帶に基くものではない。オーストラリアの原住民は、周知の如く子供の出生に關する父親の生理的役割についての認識はなく、肉體的な親縁はその間に認められず、單に母子の間にのみ「血と肉」との紐帶が知られるのみである。従つて血縁的關係は母系に従つて進られ、父親は子供に對してその保護者であり、子供の出生においてその祖先靈を壇所に採してくれた者である。その父系的親縁關係は、かかる集團地域を棲家とする祖先の精靈の肉化によつて相互に結合するといふ神話的信仰に基くものであり、一種の宗教的紐帶なのである。

事實においてかかる地域的氏族は、部族の儀禮的な機能を營む集團である。それは部族の神話的信仰に基いて、祖先の自然種増殖の儀禮を行ひ、またその集團に關係するトーテム的儀式を擔當する。尤もかかる地域的氏族であつて同時に祭祀的氏族でないやうな集團も、例へばニュー・サウス・ウェールズ、東ヴィクトリア、下マレイ河流域の部に部分的に見出されるが、大部分はその地域の精靈に結合された成年男子を成員とし、従つてまた男系的な宗教的儀禮集團であり、それと關係するトーテムズもまた祭儀的生活に關はるものである。

父子關係が上述の如く謂はば宗教的親縁關係であるに對して母子の關係は「血と肉」との肉體的紐帶によつて結合される。従つて部族の各成員の血縁關係は母系をもつて進られ、彼等の居住の地域の制限を超えて部族の全領域に互つて氏族の連帶の社會組織を形成し、部族的統一とその内部における成員の社會的諸關係を規定する重要な役割を擔つてゐる。それは地域的氏族が土地の女や未入信の子供を含まず、入信の儀式を経た男子に制限され、その機能は宗教的儀禮的であるのに對して、血と肉の自然的な血縁的親縁にある凡ての成員を含み、現實的乃至は擬制的な血縁關係によつて部族の全體に及ぶものであり、従つて部族の成員は凡てかかる社會的な母系的氏族の何れかに屬すること

となる。

元來未開種族にあつては、その血縁關係は社會組織の基礎をなすものであり、彼等の社會的行動の一切を規定する根據をなしてゐる。オーストラリアにおいてもそれは所謂「分類的」親族關係に従つて、血縁が個々の成員の間に辿られるのではなく、一定の類型に従つて關係するのみならず、それによつて成員相互の社會的交渉の規定が決定される。またその關係は現實的に進られる血縁の間にとどまらず、かかる現實的血縁の知られぬ間では、一種の癡制によつて親族關係の特定の範疇に入れられ、かくして一定數の親族關係の範疇が部族の全範圍に互つて適用されてゐる。

かかる血縁關係と分類的稱呼が原住民にとつて強くはたらいてゐることは、例へば上述の地方的氏族集團を呼ぶ場合に、その個有名によらずに、それに屬する成員の血縁關係に従つて、私の「母の兄弟」の地方、「母の母の兄弟」の地方などと呼んで區別したりするといふ如くである。このやうな親族關係によつて呼ばれる母方の女系の親族集團は、その血と肉との親縁關係によつて特別に強固に結合され、常人にとつて特に重要な意味を有することは明かであらう。

かかる母系的氏族集團は血縁的連帶によつて結合するのみならず、更に今一つの結合紐帶を有してゐる。即ちそれは特定の自然種たるトーテムに關係して一種のトーテム集團を成してゐる。その成員は彼等相互の間で血肉的な近親關係にあると同時に、そのトーテムたる動植物種に對して同様な血肉的連帶性にある。かかるトーテムイズムは南西クキーンズランド、西方ニュー・サウス・ウェールズ、ヴィクトリア、東方南オーストラリアの各地に見出されるもので、オーストラリアのトーテムイズムにおいて重要な地位を占めてゐる。それは地方的氏族のトーテムイズムが主として祭祀的な機能を有するに對して、この血縁的集團の社會的構成に對應して、社會的な機能をもつ「社會的」トーテムズムの特色が注意される。

上述の如き血縁關係に基いて、オーストラリア部族の社會組織は、母系的氏族の集團と共に、四分組織 (Section)

八分組織 (Subsection) などの社會集團及び半族 (Moiety) 四分族 (Semi-Moiety) などの區分が行はれる。これらはフレイザーなどによつて屢、婚姻「クラス」と呼ばれ、婚姻統制の組織であると考へられ、また事實においてそれらが外婚關係の集團を成す場合が多い。しかしその本來的な機能は婚姻統制にあるのではなく、特定の親縁關係にある者を社會的交渉の類型に役立つやうに分類し、或ひは祭儀的集合に關係する區分を行ふことにあると云へる。即ち四分組織は一方においては血縁關係の親子の世代にあるものを區分し、他方同世代に關しては交叉従兄弟姉妹の關係にあるものを(相互に配偶の關係のものではない)對應集團に配當することによつて、部族成員を四群に分つ組織である。¹¹⁾ その場合親子の世代の區分は、概して母子の關係によつて配當されるので、四個の集團は母系に從つて區分され、從つて部族の複雑な親族關係にあるものが凡てこの四個の單純な關係に整理される。かくして部族成員間の相互的交渉はこの四分體の關係に從つて規定され、同一集團にあるものは「一族」と見做される。次の八分組織はその各、を更に兩分して交叉従兄妹の一群を區別して、自己の對應集團と別個の集團に配當する結果生じるものである。これは彼等との婚姻を禁止する風習のある部族にとつては便利な組織であるが、しかしかかる婚姻を禁止する部族でも八分組織を採用せず、四分組織にとどまつてゐる部族が多數あり、また逆にそれはかかる婚姻制約のない部族の間に擴張する事實が見られる。それはかかる組織が婚姻統制を本質的因子とするのでなく、上述の如くに部族の親族關係の社會的區分に關はることを物語つてゐる。

これに對して四分族は八分組織の對應する一對の集團をまとめて四個の組織を形成し、半族は父系または母系の親族關係に從つて部族を兩分する組織である。何れもその機能は専ら祭祀的であり、部族の儀禮的集會、例へば入信儀禮、トーテム儀禮、埋葬儀禮などを執行する集團單位となり、各半族はそれにおいて一定のグループ、義務、特權を共同にしてゐる。半族には上述の如く母系によるものと父系によるものがあり、その分布を異にし、前者は東部に多く、四分組織を伴ふものも伴はぬものもあるが、その母系半族は各、一定數の母系的社會的トーテム氏族から成つて

ゐる。¹⁾これら上述した組織は夫々の機能目的に従つて部族成員を一定の群に分類する社會的區分であり、オーストラリアの各地に見出されるものであるが、かかる區分は何れも成員の血縁的な親族關係を基礎として行はれる。そしてその各々の群の成員の間には血縁的氏族集團における如き一定の親縁關係が存し、例へば四分體の成員が皆「一族」或ひは「皮膚」を一つにするものと呼ばれる如くであるが、このやうな親縁關係はまた特定の自然種に對しても認められ、トーテム的關係をなしてゐるものが多い。

オーストラリアの社會的集團には、これらの地域的・血縁的な諸集團と共に、更に年齢・性によつて分類された集團がある。¹⁵⁾原住民の間では老人と、年長者に對する尊敬と權威が強し、従つてかかる年齢的世代關係に従つて身分的階段が成立する。かかる關係はまた親族關係の用語の中にも反映されてをり、各階級の間には食物のタブー、宗教的行事の役割などの區別があり、特に成年期にあつては宗教的な傳授を伴ふ入信儀禮と結合してゐる。また性の區分と連帶は男女の勞働の區分に見られるのみならず、父子の男系の連帶は上述の如く神話的精靈的な紐帶を基礎とし、これに對する儀禮的生活において強固に結合してゐる。かかる兩性區分はまた各々の群がその「性トーテム」をもち、相互に標識とされる場合があり、中央部及び南東オーストラリアに互つて見出されるところである。

以上オーストラリア原住民の社會生活と集團組織について概観したが、これを要約すれば第一にその生活が自然的であり、自然的條件に依存すると共に、その關係の中で自己の生活に安らつてゐる。次にこのやうな自然との連帶性は神祕的な靈的紐帶として彼等に意識され、神話的な觀念において表現されてゐる。更に第三にその社會的組織が地域的・血縁的な自然的基礎に關係して種々の集團を形成することは未開種族に共通な現象であるが、その連帶が同時に一定の自然種に及ぼされ、その社會組織が何れもトーテム集團の形態をとる傾向を有する。かくしてオーストラリアにあつてはその社會集團の凡ゆる形態にトーテムズムの關係が見出される。かかる傾向は一方においては彼等における自然的連帶性の觀念と、他方自然に對する集團の行爲的關係の様式とにおいて、その深い基礎をもつものであら

- 111 A. P. Elkin: *The Australian Aborigines*, p. 126.
 12 p. 18 sq.
 13 p. 22 sq.
 4 B. Spencer & F. J. Gillen: *The Arunta*, vol. I, p. 88 sqq.
 5 A. P. Elkin: p. 42.
 6 B. Spencer: p. 9.
 7 A. P. Elkin: p. 77. しかしムルキン地方を調査したウォナーによれば、懷妊における生理的交渉の原因性に関して、原住民は知識をもつてゐるらしく、殆ど老人たちはそれが原因であることを承認してゐる。しかし懷妊と出生において父の生理的組織は、彼等ほどつても何等重要な問題とはならず、その精密的組織が關心の中心となつてゐる。——Cf. W. Lloyd Warner: *A Black Civilization, A Social Study of an Australian Tribe*, 1937, p. 22 sq.
 ムルキンもまた部族によつて性的交渉が子供の出生のために女の準備となると考へてゐるものがあり、ヨーク師の北部ではそれが必要條件と見做されてゐることを述べた。cf. p. 181.
 8 A. P. Elkin: p. 81. 9 p. 79 sq. 10 p. 74.
 11 J. G. Frazer: *op. cit.* Vol. iv, p. 105 sqq.
 12 A. P. Elkin: p. 85. 13 p. 88. 14 p. 82 sqq. 15 p. 75 sqq.

II

オーストラリアのトーテムズムの特色は、先づ第二にそれが殆んど凡ての社會組織と結合することである。従つてそれはトーテム集團を形成するその構造形態に關して様々な多様性を示してゐる。第二にそれはトーテム種と集團

成員との關係に關して、人間と自然とを結合する一體性の觀念を背景としてをり、單なる名稱の外面的な偶然的な結合ではない。即ち人間の活動が自然の活動に規定されこれと結合してゐると共に、その自然種は人間の生命的活動によつて相互的に生命が附與されるといふ信仰である。しかしてかかる一體性の觀念は特定の集團の特定の自然種との結合の關係によつてその表現をもち、これによつて社會組織に特定の色調を與へてゐると共に、それは神話的な表現においてその一體性の保證を擔ひ、自然に對する儀禮的なはたらきかけによつてそれを實現する。このやうな根本的觀念と結びつくことによつて、オーストラリアのトーテムズムはその社會的生活の本質的の制度を構成し、社會的生活における様々な機能をもつてあらはれる。

かくしてオーストラリアのトーテムズムは、トーテム集團を構成するその形態と、かかるトーテム形態が部族生活において演じる機能とに従つて多様な區別が認められる。エルキンの區分によれば、その形態については、個人的・性的・半族的・四分組織的・八分組織的・民族的・地方的・及び連鎖的(Multiple)トーテムズムの各種の形態がある。それは部族の社會組織に關係し、その基礎に従つて分類された區分であるが、これらの内で最も重要なものは氏族トーテムズムと地方的トーテムズムの形態である。これらの諸形態は同一部族の内部において普通三・四種のものをも共有せしめてゐる。即ち一人の部族成員は同時に數個のトーテムを有し、各の集團に屬してゐるわけである。トーテムズムの形態が複雑で調査の困難であつた所以である。

次にその機能と意味に従つて、オーストラリアのトーテムズムは、社會的・祭祀的・懷妊的・夢幻的・分類的・補助的の區別が認められる。これらの諸機能も相互に複合してをり、同一形態のトーテム集團が單に一つの機能だけでなく、數種の機能を統合し、また逆に異なる形態のトーテム集團が同一の機能を共同に營む場合があり、トーテムズムの複雑性を倍加してゐる。しかしその機能の重要なものは最初の二つ、即ち社會的機能と祭祀的機能とである。前者は成員相互の親縁關係及び婚姻に關はるものであり、後者はかかる規定には無關係に祭祀の執行に關はる。エルキン

によればこの兩者の區別が明確にされてゐたならば、トーテムズムに關する從來からの混亂は多く避け得られたであらうと云つてゐる。従つてわれわれはこれらの諸形態と諸機能の凡てについて考察することができないため、この二つの機能を中心として、それが關はるトーテムズムの形態との關係において、社會的な民族的トーテムズムと祭祀的な地方的トーテムズムについて簡単な素描を試みるであらう。

社會的トーテムズムは、母系氏族の母子關係において見られる「血肉的」紐帶がトーテム種との間にも認められるもので、親族關係と婚姻による成員の「社會的」な交渉に關はる機能をもつてゐる。従つてそれは概して母系的な繼承によつて傳へられ、母系的氏族トーテムズムの形態をとるが、同時にまた、母系の半族、四分組織、性トーテムズムの諸形態もこれと同様な社會的機能を有するものである。

既に見た如くオーストラリアの血縁的親縁關係は、母子の生理的紐帶に従つて連られ、その血肉の共同に基いて母系的氏族を形成する。このやうな血縁的共同關係はまた同時に自然の中にも見出され、かかる氏族集團は特定の自然種との結合にもたらされ、その成員はかかる自然種を同様に血肉的な近親と見做してゐる。従つて社會的トーテムは血縁的な氏族成員が共同にしてゐる血肉を象徴するのみならず、ある種の性トーテムズムに見られる如くそのトーテム種との出自の共同やまたその相互の轉生が信ぜられてゐる。かくの如き血縁的な共同により、社會的トーテムズムにあつては、その成員は自然的な出生の事實によつて決定され、従つて祭祀的トーテムズムにおける如く成員の男女の性の區別を問はず（勿論性トーテムズムは性の自然性に従つて配當されるのであるが）、また何等かの入信の儀禮や知識に制限されず、特定の血縁的親縁の關係にある凡ての成員を含むものである。

トーテム的自然種に對するこのやうな親縁關係は、更にそれに對する成員の行爲を規定する。トーテム種の殺害、食用のタブーや成員間の婚姻の禁忌の如きは、何れもかかる血肉の連帶の觀念に結合するものである。また逆にそれは成員に對して親密な友人、保護者の役割を演じ、彼等の危険を豫知或ひは保護し、彼等の行動に勇氣と力を與へ、

また遠方の同族の安否を報知するなどはたらしきをする。

以上の如く社會的トーテムズムは、母子的な血縁的な集團と結合し、民族的トーテムズムその他の形態において、その共同關係を象徴し、かかる親縁的交渉を規定する社會的機能を有するものである。それと同時にかかる社會的成員間の親縁關係は、トーテム種において表現され、自然的な反映をもつのみならず、更にまた一定の自然的部門に結合されることによつて、かかる社會的關係が自然の全體性の中で安定をもち、社會的制度の權威を保證される。このやうな關係は、新たに形成される社會組織がかかるトーテムズムによつて潤滑されて行く事實の中に見出すことができるであらう。例へば四分組織、八分組織は母子の世代的區分と交叉從兄妹の同世代關係に從つて部族の社會的區分を行ふ組織として、それが部族集會などにおいて複雑な親縁關係を明確な範疇に區分し、成員の相互的交渉の規準を與へる社會的な効用のため、この制度は各地の部族の間に廣く採用されるに到つたことは上述の如くであり、このやうな集團の成立は部族によつては比較的最近のものではあるが、原住民の自然に對する緊密な生活關係に從つて、これらの集團はトーテム的な仕方では考へられる傾向が認められる。即ち同一分肢體に屬する成員は互ひに近類關係にあるのみならず、彼等はまた特定自然種たるトーテムに關係せしめられ、四分組織的トーテムズムの形態を構成する。かかる事實は社會的トーテムズムが、一方において組織的な社會集團との關聯において形成される複合的形態であることを物語り、從つてその成立において異なる起源を有するものであらう。それと同時に他方かかる制度が原住民における自然に對する密接な生活の共同と生命のトーテム的態度をその結合の深い根柢とすることを示してゐる。即ち原住民における社會組織はかかる自然的關聯の下にもたらされることによつて安定し、社會の全體の構造の中で關聯する部分として自己自身の機能を充つことができるであらう。從つてそれは社會組織に對する單なる外面的附加物ではなく、自然と社會との生命的連帶の意識によつて内面的に結合するものであり、それによつて自然の特定部門が社會的關係に汲み取られ、自然が社會化すると同時に、社會組織が自然の全體性の中に統一され、その權威と安定とを

見出すことが可能となるのであらう。

註 1 A. P. Elkin: p. 129. 2 p. 133. 3 p. 136. 4 p. 95, 135.

三

以上の如く社會的トーテムズムは成員の血肉的な親縁關係を象徴し、自然種をかかると同一の關係に結合するものであつた。従つてそれは母系的な氏族集團を基礎とし、その社會的機能に關はるものである。これに對して祭祀的トーテムズムは部族の神聖なる儀禮生活に關はり、祭祀が表現演出してゐるところの神話的世界そのものを象徴してゐる。従つてそれはかかる祭祀を司る集團である地方的な(父系的)氏族を基礎とし、その成員との精靈的な神祕的紐帶をもつて結びつく。社會的トーテムズムが母系的な血縁に従つて、その居住の地域的制約を越えて結合し、一定の親族關係にある凡ての男女の成員を含み、部族の全體を相互的關係に連ねるものであつたのに對して、祭祀的トーテムズムにあつては、神話的に聖別された一定の地方と精靈的な關係にある特定の地方的集團に關はるのみならず、かかる祭祀の神祕的秘儀に參與することを許された特定の成年男子によつて組織され、地方的な父系氏族を形成するものであり、その部族的な關聯は神話體系の部族的統一により保證され、祭儀の相互的交渉によつて關係をせしめられるものである¹⁾。

既に述べた如く部族領域には、神話的英雄の業蹟によつて記念され聖別された場所が各地に散在する。彼等の地上に活動したアルチイラ(Altjira)と呼ばれる神聖な太古の夢幻的時代にあつて、神話的英雄は部族領有の各地を遍歴して、その途上において自然的形狀を整へ、部族の社會的諸制度や技術を制定し、各所で自ら儀禮を執行してこれを傳へた。このやうにして季節の自然的交替が行はれ、動植物は繁茂する。またそれが生じる特定の場所での自然種の生命が繁殖する儀禮を行つて、そこに生命の棲家を殘した。英雄の通路は部族の交通路として現在守られてをり、岩

の堆積や泉や洞窟は英雄が休息した地點であり、また人間の靈—兒を残して一時自ら姿を消した所である。このやうにして部族の特定の自然的領域は、アルチイラ英雄によつて人間の精霊中心と定められ、そこに未だ生れぬ人間の精霊を宿し、その精霊的部分たるチュリంగాを残してをり、また他の地點にあつてはトーテム種の精霊的中心を定め、そこに例へば大石を残してその増殖のための儀禮の場所として聖別した。かくの如く自然と精霊との配置創設を行ひ、その儀禮を制定した後、アルチイラ英雄は他の場所で石に化して地下に没し、地上から永遠に姿を消したが、そこは重要な聖域として記念され、英雄の生命の象徴たるチュリంగాが保管され、またトーテム的儀禮がそこで執行される。部族成員の現在における精霊の信仰や神話的儀禮は、このやうな神話的英雄の行動と制定とに依つて行はれる。彼等は英雄の通路に従つて交通し、その精霊的中心と結合する人々によつて聖域の崇拜の集團が形成され、祖先の行つた入信儀禮を執行する。英雄が制定した自然種の増殖儀禮は、そのままに繰り返へされることによつてその靈的中心に動植物が繁殖し、雨や季節風などの自然現象が正常に恵まれる。かくの如く部族の精霊的・儀禮的生活が神話的英雄の行動を源泉とし典據としてゐるのみならず、その日常的社會的生活の凡ての規範と風習もまた同様に神話的英雄の行つたところであり、その制定によるものである。例へば英雄は近親婚を忌避し、それを淨化し、母系的な近親關係に従つて行爲し、要するに現在の部族の社會的生活の原型を實踐してゐると共に、逆に現在の生活はかかる原型に従つて規定され、正常的に運営され、われわれの現實の中に生きてはたらいてをり、またわれわれの夢の經驗を通して現在の經驗の中にあはれるものである。

かくの如く神話的アルチイラ英雄は、部族の精霊的・文化的生活に關するものとして信ぜられてゐるが、更にまたそれはトーテム的な姿を取つて現はれる。即ちそれは時としては動植物のトーテム名を有した男女であり、これらの動植物の性質や能力を示す力をもつてゐるか、或ひはまた特定の動物や鳥そのものであつて、人間の如く語り考へるものとされてゐる。例へば南オーストラリアのエア湖附近の部族で西岸のアラバナ族 (Arabana) の神話によれ

ば、——一人の老女が湖水の附近で食物を求めてゐると一匹の大きなカンガル―に出會つた。彼女はそれを殺さうと思ふと、彼女の腹の中から一人の男の子——*Wilkie* といふ——が、恰かもカンガル―の腹袋から存が躍び出すやうに、飛んで出てカンガル―を荒地に追跡した。彼がそれを逐ひ疲れてゐると、犬をつれて獵に來た老人がこのカンガル―を知らず殺して皮を剥いだ。そこへウイルクダがやつて來てそれが彼のカンガル―であることを老人に告げて「あなたは肉を食つてもいいが、その皮は私に頂き度い」と云つて譲り受けた。このやうにしてウイルクダの放浪は續くのであるが、この地方のエイブ湖は彼がカンガル―の皮を地上に投げ敷いて出來たものだ^と傳へられ、そこまで來て彼は石に化した。彼の所持品であるナイフや袋もそこで化石し、またカンガル―も同様に石となつたと云はれる。——この神話は婚姻の禁止、獵犬の役割などを物語り、自然環境の説明を與へてゐるが、太古の英雄時代にあつて普通の動物とちがつた特殊の價値をもつた動物の相違を示してゐる。また湖水の北東のウォングングル族 (*Wongkuguru*) では、火が祭祀集團の神聖名であり、火をこす方法はその神話時代の歌を伴はねばならぬが、それは男系の父祖から傳へられて保存されてゐる。神話によれば太古の火を作つたものはイガウブラ (*Igamuru*) と云ふ野猫族の男でマカムベ河の北東の地方に屬した。彼の二人の兄弟はカンマリといふ水蛇の皮をもつてゐる。この水蛇の信仰はオーストラリアの各地に擴つてをり、屢々、虹と同一視され、雨や洪水を象徴してゐるが、また天へ昇る道と考へられる。北部のアルンヘム地方のムルンギン地方の部族にあつては、トーテム氏族はその地域の神聖な井泉を居所とする主要なトーテム祖を中心として多數のトーテムを聯關してもつ連鎖的 (*multiple*) トーテムズムの形態に屬するが、その一つの神話群によれば、近親婚を犯して放浪する姉妹とその子供が大蛇に吞まれる物語を中心とし、季節の交替と洪水によつて不淨が淨められ生物が再生する過程を象徴してゐる。この蛇はまた母たちの兄に當る「大父」を意味するユルングル (*Yurlungu*) と同一であり、その祭儀における祭具たる喇叭によつて象徴される。

トーテム的祭祀集團はこの「大父」に關係する男系の成員によつて構成され、「大父」の淨化によつてこの集團の男

子たちにトーテム儀禮の祕密が傳へられたのである。⁹⁾ 最後にエイブ湖の東岸ダイエリ族 (Dieir) のバルティラ (Paltiira) といふ神話的英雄は風の英雄で、粉礫石と大石皿を盗んだが、これを持ち上げることができず、唄を歌つて風を起してそれを吹き上げた¹⁰⁾と傳へられる。これによつてこの歌の特權は風をトーテムとする祭祀集團に屬してゐる。

以上の如くオーストラリア諸部族の神話によれば、その夢幻的太古の英雄たちは特定の自然種と結びつき、トーテムの様相を示してゐる。その祭祀的トーテムは、かかる神話の傳承を權威としこれの保證によつて、夢幻的アルチイラ英雄そのものを象徴する神聖なるものであり、單なる集團の標識ではない。¹¹⁾ 従つてそれはまた部族によつてアルチイラ (フランチ族)、ムラ (ダイエリ族) と呼ばれ、或ひは彼等の「夢幻」と云はれる。われわれが原住民に彼の「夢幻」を問へば、彼はそのトーテム動物の名をもつて答へ、或ひは彼等が管理しその儀禮的再演の特權ある神話の要約を物語るであらう。¹²⁾ 従つて祭祀的トーテムはまた祖先英雄の神話の索引的鍵とも云ふべく、彼等がその増殖儀禮に定められてゐる動植物自然種の生命との神祕的な共同をも象徴してをり、同時にかかる自然との生命的共同に一體化する手段を意味してゐる。

このやうな祭祀的トーテムの神話的聯關と意味は、またトーテム集團の役割と相關するのである。彼等はトーテムに對して神祕的な精靈的紐帶をもつて關係し、これを神聖な神話的な英雄そのものと見做すのみならず、かかる神話的祖先の神聖を保存し、それを祭祀によつて實現したければならない。即ちトーテム集團は部族の神話體系の一部を傳承によつて繼承保管し、これを解釋適用する義務と特權とをもつて組織されてゐると共に、神話に傳へられた儀禮を執行し神話的生命を部族生活の中に再生實現する役割を擔つてゐる。¹³⁾ トーテムの祖先の行動は祭儀において再演されることにより、成員たちは神話的太古の生命と一體となり、部族の歴史的傳統の神聖なる意味が彼等の前に啓示される。それと同時に社會的制度の現實はそれによつて新たな生命を附與され、社會的權威を保證し集團的な統一を強化す

る。神話の保管傳承、傳統の神聖なる意味の傳授參與、集團そのものへの入信繼承の機能は、何れもまた神話的歴史の儀禮を媒介として役割を果たすものであらう。かかる神話的傳承の再演は、また祖先英雄が各地で行つた自然種の増殖儀禮にも關はるものである。祖先英雄がそれに關係する自然種を増殖し、自然現象を統制するために執行した儀禮は、また集團の執行する義務であり、特權である。このやうな儀禮によつて、トーテム種は祖先の時代に定められた如くに繁殖するであらう。かくして神話によつてトーテムの祖先と一體であり、そのトーテム種と結合する集團は、このやうな生命の夢幻を儀禮を通して客觀的經驗の中に實現する。それはかかる權禮に關はる集團であり、そのトーテムは部族によつて「大祭式」の名を有する。かかるトーテムズムが「祭祀的」と呼ばれる所以である。

- 註 1 A. P. Elkin: p. 136 sq. 2 p. 177. 3 p. 140. 4 p. 193 sqq.
 5 L. Warner: p. 248 sqq. 6 A. P. Elkin: p. 196 sq.
 7 p. 183. 8 p. 187. 9 p. 140 sq. 10 p. 136, 139. 11 p. 140.

四

以上の如く祭祀的トーテムズムは神話的傳承を基礎とし、そのトーテムは神話的祖先の生命的一體性の信仰によつて集團と結合するものであつた。従つて集團成員の相互的結合は、またかかる精靈的紐帶によつて組織され、神話においてかかる精靈的源泉と信ぜられる特定の地方に結びつけられることによつて互ひに結びつくところの關係である。かくして祭祀的集團は、社會的トーテムズムにおける如く血縁的な血統の紐帶によるものは異り、祭祀の中心たる聖地を共同にする「地方的」なトーテムズムであり、その成員はかかる地方との神話的精靈的な紐帶によつて決定されるのである。

オーストラリアの原住民の神話によれば、アルティラ英雄は、その姿を自由に人間または動物に變形じつつ遍歴す

る途上、特定の場所に入間の精霊的部分を残したと信ぜられることは既に見た如くである。この靈的部分はブランク族ではクルナ (Kuruna) と呼ばれ、有名なスベンサーの記述によれば神話的英雄のヌムバクラ (Numbakula) がこれを作つて、チユリングの中に入れ夫々のトーテムを配當したといふ。かくて精霊は永遠の夢幻時以來地上に肉化するのをそこで待つてをり、また肉體が死ぬとそこへ歸つて再生まで留まつてゐると信ぜられる。このやうにして聖地と精霊的に結びついた人々がトーテム的集團の成員を構成するのである。従つてクルナまたは靈一兒の肉化の過程は、祭祀的集團のトーテムの決定に重大な役割を演ずるわけである。かかるトーテム獲得の様式については所謂懷妊的、又は出生トーテムズム、夢幻的トーテムズムなどがその機能を果すが、オーストラリアの多くの部族の祭祀的トーテムは主として夢幻的トーテムズムによつて決定されるのが普通である。子供の出生に關して、その肉體は母から生れることは當然であり、その血肉的紐帯が母系氏族の基礎をなすことは上述の如くであるが、そのトーテム祖先と結合する精霊的部分は父の夢または幻想によつて決定される。即ち聖所に豫め先在する靈一兒が父親の夢に現はれ、彼の母親となるべき者を問ひ、その妻の胎内に入る。母はその後にその靈一兒の夢を見る。また靈一兒が特定のトーテム種と結合して夢みられる場合もある。このやうにして父親の夢によつて決定される子供の精霊に結合したトーテムは、その地方的な祭祀的トーテム集團に所屬せしめる役割をするやうになる。従つてそれが父親の統制の下で、彼の祭祀的地方と結びつき、父系的な繼承への傾向をあらはすことはまた當然である。

しかしながらこのやうなトーテムの地方的紐帯が、例へばブランク族における如く、母親の懷妊が覺知された場所の精霊的トーテムによつて決定される懷妊的トーテムズムの場合には事情が違つて来る。即ち子供のトーテムは父親或ひは母親のトーテムとは無關係に、母親が懷妊を自覺したときに、その地方の精霊が母の胎内に入つたのだと信ぜられ、従つて子供はその土地のトーテムを自己のトーテムとし、その地方を中心とする祭祀的トーテム集團に配せられるのである。このやうなトーテムは、南オーストラリアの西部に見出される如く、母親の懷妊の場所でなく子供の

出生の場所によつて決定される場合もある。⁷⁾しかし何れにしても子供の懐妊トーテムは、その繼承に關して父母のトーテムとは關係なく、偶然的に決定されるわけである。その場合父方居住制のために母親の懐妊または出産は、大部分父親のトーテム地方で行はれ、子供のトーテムが父親の地方的祭祀集團に屬するのが普通ではあるが、しかし懐妊がその地方とは違つた土地で認められ、従つて子供のトーテムが他の地方のトーテムを得る場合、及び反對に他の地方に屬するものがこの地方のトーテム集團と同一のトーテムを共有し、かくして父と子が別々の地方的トーテムをもつことになる。ブランチ族においては懐妊的トーテミズムは地方の祭祀集團への權利を生じ祭祀的トーテミズムの機能をもつるので、自己の屬する地方のトーテムと異り、他の地方のトーテムである場合、彼はそれに參加することができる。

かくの如き懐妊におけるトーテムの精靈中心の地方との結合の觀念は、トーテムの精靈が特定の地方に先在するといふ神話的信仰から論理的に導き得る思想であると共に、スペンサーによつて幾多の例證が與へられて以來、久しくオーストラリアにおけるトーテム獲得の典型的な様式と考へられ、トーテミズムの理論において各種のトーテム形態がこれを基礎として解釋されたことは周知のところである。しかしエルキンの如くその後の綿密な調査によれば、かかる懐妊トーテミズムは、祭祀的な機能を營む地方的な父系的トーテム集團と區別さるべきであり、前者は成員の懐妊を特定の地方または自然種と結合することを目的とするもので、その祭祀的な機能は謂はば第二次的な機能と云ふべきである。従つて懐妊トーテムは例へば東方キムバレーイにおける如く、一個の動植物との結合を示し、一種の守護靈的な機能をするものもあり、他方大多數の祭祀的トーテムは夢幻的トーテミズムを採用し、父親の決定に關することは上述した如くである。更にまたスペンサーにおけるかかる機能の混同は、例へばウラブンナ(アラバナ)、デイエリなどの諸族における母系的トーテミズムを認めながらその社會的機能を識別し得ず、懐妊的、祭祀的トーテミズムを同一の根據で理解するといふ結果を導いてゐる。¹³⁾

しかしながらアラント族においてもかかる懐妊的トーテミズムの地方的祭祀的トーテミズムに對する關係は、母親

が父のトーテムの地方において懐妊するといふ事實によつて一般に父系化の傾向を有すると共に、他方祭祀集團の首長の地位がその地方の出身で父と同一の集團に屬するものに限られ、他の地方からこれに屬するものを排除するといふことによつて統制されてゐる。かくしてその地方的トーテミズムは父系的繼承の方向を辿り、北方アラントにおいては既にそれが原理として確立してゐる地方も見出される。かくの如く地方的祭祀集團が父系の男子を成員とすることは、アラント族においても認められ、その他多くの部族が自己の祭祀的トーテムをまた「父親」といふ稱呼で呼んでゐる事實によつても示され、或ひは神話的傳承の中にその神聖な保證を有つものもある。例へば上述のムルンギン族の神話において、氏族の祖先の姉妹は先づ近親婚の罪を犯して地方を放浪し、諸のトーテム動物種の命名に係する。しかし姉妹は大父（ユルングウル）たる大蛇の泉に誤つて月經の血を流してこれを潰し、蛇によつて呑み込まれることが語られてゐる。これによつて女が祭祀的生活において不淨なものとして排除されることを象徴してゐる。更にまたこの部族の「懐妊的」トーテムは、子供の母親がその父の神聖な非泉から來た葦一兒によつて懐胎することを示してをり、地方的な「父系的氏族」を構成する。神話は尙ほ續いて「大父」は子供の割禮を要求して神聖なる自己の許に呼ぶことを物語つてをり、かくして入信儀禮か定められ、成年男子はその母の手を離れて「父」の祭祀的集團への加入が認められる。ムルンギンの神話は祭祀的トーテム集團の意味と入信儀禮との關係を明かな形で物語つてをり、従つてまたそのトーテム的祭祀は、かかる集團への入信儀禮を神話的歴史の儀禮的再現における重要なる中心的構成部分としてゐる。父系的氏族のトーテムはかかる入信儀禮を通してその神祕的な一體性の意味が啓示される成年男子はそれを通してトーテム集團に迎へ入れられるのである。

以上によつてオーストラリアの祭祀的トーテミズムの集團構成が理解されるであらう。即ちそれは先づ第一に部族の神話體系を基礎とする地方的な精靈的紐帶によつて結合する地方的氏族である。次にかかる精靈との結合は、懐妊的、夢幻的トーテミズムなどがその肉化の原理としての機能を果すが、これを發見決定するには主として父親が參

興し、従つてその繼承は父系的傾向を有する。更に第三にそれは女子と未入信の子供とを局外者として排除し、従つてその集團への参加は厳格な入信儀禮を伴ふのが普通である。かくしてこの集團の任務たる神話的儀禮の執行において入信儀禮が重要な要素として關聯し、トーテム的な神話的信仰を背景として諸々の祭祀との内面的統一を構成してゐる。

オーストラリアの祭祀的トーテム集團は、かくの如き地域性の原理によつて部族の各地に分散して成立するが、それらはまたその背景としての神話の體系的關聯によつて相互に關係し、祭祀の共同によつて部族的統一の機能を演ずるものである。

神話的英雄の旅の通路は、先づ部族領域内の各集團を相互に連結するはたらしきをする。地方的集團はかかる通路において祖先との精靈的結合に入ると共に、それによつて結びつけられた「地方」の人々との友情的・神祕的紐帶をもつ。集團間の交通はこの通路によつて保證され、その祭祀的生活の相互的な依存關係が成立する。例へばデイエリ族の神話において、その神話的英雄は部族の境界を超えて遙かに南方のペラチルナ地方にまで石皿を運んだが、デイエリ族の人々はこの途に従つて石板を獲得する部族的な經濟的遠征を行つてゐる。このやうにして集團の儀禮的交通のみならず、日常的經濟關係が成立するのである。

次に集團の相互的關係は、かかる神話的連帶による祭祀の共同によつて結合される。各々の地方的集團は上述の如く神話體系の特定部門を傳承管理し、これに關係する祭祀を執行するものであつた。然るにかかる祭祀の執行はその集團の問題たるのみならず、近隣の他集團の關心・利害の對象となつてゐる。例へば上のデイエリ族の「風」氏族は風を起す歌謡の特權を有し、執行する義務があるが、季節の風を調節するために祭祀をそれが部族の全體にとつて重要な關心事たることは云ふまでもないところである。またブランチ族その他のトーテム集團には自然種の増殖儀禮を行ふものが知られてゐるが、その動物種は部族の食料として日常にとつて重要な意味をもつてゐる。従つてそれが適

當な季節に繁殖するために行はれる増殖儀禮は、部族的關心の對象であるのみならず、それは部族によつては或る他の集團が儀禮執行を當該集團に申込み要請するといふ仕方でも表現され、このやうにして集團の祭祀に他の集團が間接に關係する場合がある。地方集團の祭祀の共同は、それが互ひに半族組織などに結合され特定の祭祀における役割を相互に分擔するといふ仕方で行はれる。また或る地方集團はその土地を通過した他の凡ての神話的英雄の足跡に關係し、從つてこれらの英雄に關はる集團の祭祀に對しても一定の役割を有し、かくして一つの祭祀集團が多種の祭祀と結合する。²⁰⁾このやうな他の祭祀集團への關與は、成員の血縁關係によつても規定される。南オーストラリア及び中央オーストラリアの諸族にあつては、人は父の地方的集團に屬するのみならず、母の兄の集團の祭祀にも參加することが許され、その補助的な役割を演ずる。デイェリ族においてはこのやうな關係をマドッカ (maduka) といふ名稱で表はし、これを母の兄から繼承し、父から繼承する第一次的なピントラ (pintara) と共に第二次的トーテムを表はしてゐる。²⁵⁾また個人の懷妊的トーテムが自己の屬する地方のトーテムと異なる場合には、前者に對しても一定の權利を與へることは既に見た如くである。このやうにして特定の地方的集團及びその成員は、他の諸地方の集團との相互的關係を成立する。それと同時にまたかかる神話的交錯によつて逆に同一の地方に屬する成員が別々の神話的英雄と結合し、數個のトーテムに分れてゐる現象も見出される。祭祀的トーテムの複雑な構造はこれに由來すると共に、かかる關係の相互性によつて、部族生活の内面的關聯が保證され、それが部族的全體の事體である所以が理解されるであらう。

(未完)

註1 A. P. Elkin: p. 139. 2 B. Spencer: I. p. 357 sq.

3 A. P. Elkin: p. 176. 4 p. 145. 5 Ibid.

6 p. 130 sq. B. Spencer: I. p. 76 sqq., 363 sq.

7 p. 132. 8 p. 131 sq.

